

内藤記念くすり博物館だより

資料紹介

2011年度企画展「病まざるものなし～日本人を苦しめた感染症・病気 そして医家～」

内藤記念くすり博物館と内藤記念科学振興財団は、2011年度企画展「病まざるものなし～日本人を苦しめた感染症・病気そして医家～」を4月28日（木）より来年3月25日（日）まで開催しています。

この企画展では、昔から日本人を苦しめてきた疱瘡（ほうそう：天然痘）や麻疹などの感染症を中心に、中風（ちゅうふう）や癰（しやく）、疝気（せんき）などの慢性・急性の病気がどのようなものであったか、そして、当時の医師はこれらの病気にどのように立ち向かっていたのかを、主に江戸時代から昭和初期までの資料や文献からご紹介しています。



◆企画展で取り上げている感染症・病気◆疱瘡、麻疹、梅毒、虎列刺（コレラ）、瘧（おこり：マラリア）、赤痢、百斯篤（ペスト）、窒扶斯（チフス）、労咳（ろうがい：肺結核）、はやり風（インフルエンザ）、中風（ちゅうふう：脳卒中）、血の道、脚気、疝気、癰、食傷（しょくあたり）、霍乱（かくらん）、溜飲（りゅういん）、虫、腎虚（じんきょ）、腎張り（じんばり）、りん病、消渴（しょうかち：糖尿病）

病気との長い闘い

医学・薬学が発展した今日であっても、私たちは病気を恐れ、何とかかからないようにと願っています。まだ医学・薬学の知識が不十分だった時代、人々は病気というものをどのように考え、どう対処しようとしたのでしょうか。

日本では古代より、疱瘡や麻疹などの感染症がたびたび流行し、多くの人々が亡くなりました。古代においては中国や朝鮮半島から医師が来日し、医療活動は行われていましたが、まだ加持祈祷に頼ることが多かったといわれています。

奈良～平安時代にかけては、歴史書や貴族の日記の記録から、中風、消渴、瘧などの病気が知られていたことがわかります。この時代には国家による医師養成が行われるようになりました。やがて武士が台頭して戦乱が続いた時代になると、僧侶や武士の中から医師になる者もありました。

江戸時代には漢方医学や、オランダから伝わった蘭方医学が発達し、多くの医師がさまざまな病気治療に取り組みました。海外からは16世紀に梅毒が、また幕末にはコレラが伝来して猛威をふるいました。明治時代には工場や軍隊を通じて、労咳の感染が拡大しましたが、日本の医師は、ドイツやイギリスを通じて西洋医学を吸収し、病気の治療を推し進めていきました。



絵巻物「疾草紙（やまいのそうし）」江戸時代の模写
平安時代に珍しいと思われた病気17種類を絵と文章で紹介したもの。この絵は医師が目の手術を行っている場面であり、周囲にはものめずらしげにのぞきこむ人々の姿も描かれている。医師は貴族と同じような服装をしている。

恐れられた感染症

病原体の存在が知られていなかった時代には、人から人へと次々とうつる感染症は疫病の神や悪鬼の仕業と考えられていました。このような恐ろしい病気に対して、まじないや民間療法にすがる人々に対して、医師は医学書をひもとき、実際に治療を行って経験を重ね、よい治療法がないかと探し求めましたが、対症療法にとどまっていた。感染症の治療が進むのは20世紀になって、病原菌の発見、ワクチン療法や化学療法剤、抗生物質など優れた薬品が登場してからのことでした。

疱瘡 激しい症状と後遺症に苦しむ

疱瘡(ほうそう)は別名・痘瘡と呼ばれた天然痘ウイルスによる感染症です。日本では平安時代から流行を繰り返し、大勢の死者が出ました。

天然痘の症状は、激しい頭痛と高熱に見舞われるものです。体中にできた発疹が膿疱(のうほう＝うみ)となり、やがて膿疱の跡があばたとして残るため、「痘瘡は見目定め」といわれ、多くの人があばたで容姿が変わり、苦しみました。

疱瘡の研究が進んだのは17世紀半ばで、中国から日本に疱瘡の治療の秘訣が伝わりました。1796年にイギリスの医師・ジェンナーが牛痘接種法を発見し、嘉永2年(1849)に日本に伝わると、予防接種が普及しました。



『為朝の武威 痘鬼神を退く図』
明治23年(1890)
孤島のため本土から疱瘡が伝わらなかったため、八丈島に流罪となった鎌倉時代の武将・源為朝を恐れて痘瘡神が島によりつかないという伝説が生まれた。

『痘瘡面部伝』
年代不明
痘瘡の症状を表した図が記載されている。

梅毒 長年にわたり体を侵す病

梅毒は細菌・梅毒トレポネーマによる性感染症で、アメリカ大陸からヨーロッパ、アジアを経由して16世紀頃に日本へともたらされました。

特効薬がなかった江戸時代には鼻が落ち、腫瘍ができ、脳や神経が侵される症状が、数年から数十年かかって進行し、末期には体が腐乱して穴が開くこともあり、苦しみながら死を迎えました。ヨーロッパや日本では、水銀中毒のおそれがありましたが、水銀軟膏や水銀の蒸気による治療法が行われました。



『(絵本) 黴瘡(ばいそう) 軍談』
梅毒にかかった江戸時代の医師・船越敬祐は、専門の医学書以外に、挿絵入りの読み物を出版し、一般の人々に治療法を紹介した。

麻疹 命定めと呼ばれた病

麻疹は麻疹(ましん)ウイルスによる感染症で、麻疹にかかるると発熱や咳などの症状を経て、4、5日間全身に赤い小さな発疹が続きます。麻疹は疱瘡より感染力が強く、「麻疹は命定め」、つまりかかると命を落とすと恐れられた病気でした。

麻疹は疱瘡と同様、生涯に一度麻疹にかかれば再びかかることがなく、免疫ができた人の数が多い間は大規模な流行は見られず、15～20年間周期で流行しました。そのため医師が麻疹の患者を診察することは生涯に一、二度であり、治療経験が少ないために治療が難しかった一面もあったようです。



(左) はしか絵「麻疹軽くする法」文久2年(1862)
麻疹の患者を医師が診察し、その周囲には麻疹の疫鬼たちが描かれている。
(右) タラヨウの葉
絵に描かれた多羅樹葉ははしかが軽く済むようにまじないの言葉を書いた。

虎列刺 急激に死へと進む

コレラは18世紀にインドからヨーロッパ人を通じて世界中に広まりました。コレラ菌による感染症であり、菌が人体内で産出する毒素によって激しい下痢と嘔吐が引き起こされます。症状の進行が早く、2～3日のうちに死んでしまうため、「三日ころり」、感染の速さを千里を走る虎に、また恐ろしさを狼になぞらえて「虎狼狸」と書くこともありました。

安政5年(1858)の大流行の折には、緒方洪庵は、『虎狼痢治準(ころりぢじゅん)』を緊急出版して、当時の最新の治療法を紹介しました。



薬品「虎頭殺鬼雄黄丹(ことうさっきゆうおうえん)」と効能書
安政年間(1854 - 1859)に、大坂の少彦名神社で配布されたコレラの治療薬とその効能書。雄黄などの砒素化合物、虎の頭骨など10種類の生薬が配合されている。

感染症以外の病気

病気の中には、感染症のように急に激しい症状に襲われて命を落とす病気もあれば、長い間同じ症状に苦しむ病気もあります。ただ現在とは病名が異なり、たとえば脳血管疾患は中風（ちゅうふう）、腹や胸に激痛が走る症状全般は癰（しゃく）、主に男性の下腹部が痛む症状全般は疝気（せんき）と呼ばれました。消化器系の病気としては、吐き下す症状の食傷（食あたり）、急性胃腸炎とされる霍乱（かくらん）、慢性胃炎とされる溜飲（りゅういん）がありました。このような病気に対して、医師は漢方薬や鍼灸による治療を行いました。庶民も市販の薬を使ったり、食べる物に注意するなど経験から対処法を編み出しました。しかし、江戸時代までは血管やホルモン分泌などの体の仕組み、ビタミンなど栄養素の存在、寄生虫の生態などが知られていなかったため、治療の効果はなかなか上がりませんでした。明治以降に最新のドイツ医学や栄養学・衛生学などが導入されてから解明が進み、効果的な治療が行われるようになりました。

疝気 男性特有の下腹の痛み

疝気（せんき）は下腹の痛む慢性病とされました。現在では神経性腸炎や寄生虫症、筋肉痛、男性では睾丸炎（こうがんえん）、脱腸（＝ヘルニア）などの下腹の痛む症状が含まれていたといわれています。

また、疝気」の中でも睾丸が腫れる症状は、脱腸により腸が睾丸に降りた場合や陰嚢水腫が考えられます。



疝気の患者（左）「難病療治 きたいな名医」（右）
江戸時代の風刺画（右）に描かれた疝気の患者（左）。疝気により大きくなった陰嚢と土瓶の大きさを比べている。

虫 わかりにくい症状の病

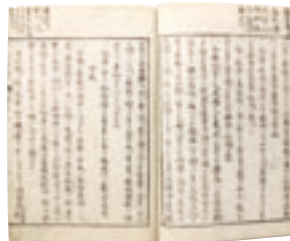
「虫」という病気は、1つは寄生虫症で、もう1つは「疳の虫」などの小児の神経過敏を指しました。江戸時代までは病気の原因や症状を明確に説明できる情報がなかったため、わかりにくい病気を「虫」が原因で起こるとしたのではないかと考えられています。



紙看板「セメンシナ丸」明治時代
回虫駆虫剤の広告。薬の名前の周囲に「虫」の姿が描かれている。

脚気 「江戸わずらい」と呼ばれた病

脚気（かつけ）は手足がしびれ、知覚異常や歩行障害が起こる病気で、現在ではビタミンB1欠乏症と判明しています。江戸時代には白米を主食とする江戸など大都市でかかる人が多く、「江戸わずらい」と呼ばれました。ビタミンB1を含む小豆を食べたり、田舎に行って雑穀を主食とすると治りました。重症化すると衝心脚気（しょうしんかつけ）といい、突然死することもありました。



『牛山活套（ぎゅうざんかつとう）』元禄12年（1699）
医師・香月牛山はこの本の中で、脚気を「故郷に帰るために箱根を越えると治る奇病」と記している。

癰 胸や腹に激痛が走る

癰は「積聚（しゃくじゅう）」、「さしこみ」ともい、胸や腹に急に激痛が走る症状を指しました。「癰」を起こした人は、痛みが激しいため、体を折り曲げるようにして耐えました。現在では、癰には、胃痙攣（けいれん）、胃痛、胆石症、急性脾炎、そして心筋梗塞や滲出性肋膜炎も含まれていたと考えられます。



広告「かぞのかんのくすり・たんしゃくりういんのくすり」
江戸時代
痰・癰・溜飲と疳の薬を売る店がにぎわう様子が描かれている。これらの病気には市販の薬もよく用いられた。

医家の成り立ち

古代中国では、医師は「方技」、すなわち人民の生命を保つ長命術などの職人と考えられており、その考え方は日本へも伝わり、源順（みなもとのしたごう）が著した平安時代の百科辞典『倭名類聚鈔（わみようるいじゅしょう）』（922～931頃）の「工商類」の中にも、「醫」＝「醫（くすし）」とあり、「治病工なり」、すなわち“病気を治す職人である”と記されています。

やがて国家が医師を養成するようになり、鎌倉時代の頃からは師弟関係に基づき医学教育が行われるようになりました。これ以降、江戸時代までは公の医療制度や医学教育のための学校というものはなく、誰でも医師になることが可能でした。

医師になるには、①医師に弟子入りして門下に加えてもらう、②医学書を学んで儒者から儒医となる、③独学で学ぶ、③経験を積んでなる、という方法がありました。

①の場合、医師の元に弟子入りしてある程度知識が蓄えられ、診断ができるようになると代脈といって、師の代わりに代診させてもらえるようになり、その後独立・開業することになります。②の場合は、儒学を修めた者であれば漢文で書かれた書物が読めるため、医学書を独学で読み、開業することが可能でした。③は特殊なケースで、例えば産科医の賀川玄悦のように、古銅鉄器商から産科医の道を進んだ医師もありました。④の経験による医師は、主に医師のいない地域で経験を積んで診療にあたった医師のことです。

江戸時代には各藩が医師の育成に取り組むようになり、藩校や藩の設立した医学校での教育が行われるようになりました。優秀な医師であれば、藩のお抱え医師に登用されたり、僧侶の高い身分である法眼などの地位が与えられたため、医師になることは、階級を越えて出世する手段のひとつでした。

明治時代になると海外諸国の教育制度にならい、医制が制定され、その下に医師養成が行われるようになりました。



医師の姿

江戸時代の図鑑『人倫訓蒙図彙（じんりんきんもうずい）』には医療に従事する者として上図の7種類をあげている。「医師」は内科医のことで、「外科」は腫れ物などを扱い、「金創」は刀傷などの創傷を治療した。



儒医（じゅうい）

儒学者は徳川幕府により奨励された儒学を専門に学んだ者で、副業として医師となることがあった。徳川綱吉の時代以降、束髪姿をするようになった。



洋装の医師

明治時代になると、医師も洋服を着るようになった。時計を持って脈をはかる医師もいたようである。

企画展図録のご案内

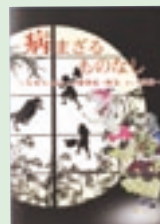
企画展図録

「病まざるものなし～日本人を苦しめた感染症・病気 そして医家～」

監修

酒井シヅ順天堂大学名誉教授

A4判 59ページ 1,100円



内藤記念くすり博物館

〒501-6195

岐阜県各務原市川島竹早町1

開館時間：9:00～16:30

休館日：月曜日／年末年始

TEL：(0586) 89-2101

FAX：(0586) 89-2197

ウェブサイト「くすりの博物館」

<http://www.eisai.co.jp/museum>

